

八女燈籠人形成立と伝統文化の継承 II

～「人形浄瑠璃」のルーツを中心に

ソーシャルデザイン学科

井上 友子

Tomoko INOUE

1. 「人形浄瑠璃」大略

古代より奇禍の忌避やその身代わりなどで使用されていた紙製の「ヒト型人形」は、時代の経過とともに信仰の対象・神の遣いとなった。祖先の魂や神々の「かたしろ」となった人形は土製・石製・木製で製作され、江戸時代に町民文化や商工業が発展すると、雛人形・五月人形・幼児の遊具・郷土玩具など祭事の装飾や学習補助具として製作され、美的にも洗練されていった。

最も早い「人形劇」の例は、古代文明期に起こった彫像文化と神的儀式が融合し、人形に祖先や神々の言葉を代弁させ、儀式としたものであった。

浄瑠璃は仏の世界において「清く澄みきった世界」を意味し、また俗世では、平曲や謡曲に発した琵琶・扇拍子による音曲の語り物と、承け三味線を使って発展した諸派の音楽との総称として使われた。時代がくだり室町時代末期になると、当時流行した草子語りの演題「浄瑠璃物語」にあやかり、「浄瑠璃」とよばれ人口に膾炙するようになった。

浄瑠璃と人形劇は異なる発生源を背景とするが、1684年、竹本義太夫が大坂(維新以前の地名)の道頓堀に竹本座を建て、浄瑠璃と人形劇が合流し「人形浄瑠璃」として隆盛を極めることになる。その後「人形浄瑠璃」は、「文楽」とも呼ばれるようになった(本拙考8. 人形浄瑠璃と文楽を参照されたし)。

2. 八幡信仰について

1) 「八幡神」大略

「八幡信仰」は、九州の宇佐八幡宮を本源とし、古くは大和朝廷の守護神の位置付けにあった。平安時代以降には都の守護神として尊ばれた「八幡神」は、源氏の氏神から「武

家の守り神・武運の神」となり全国に周知される「信仰」の対象となった。「八幡神」は、時代の推移とともに、厄災・安産・子育ての神として拡大解釈されるようになり、現在我が国の八幡神社数は4万600社ほどを数えるまでに増大した。

「八幡神」の総本山「宇佐八幡」がある宇佐は畿内や出雲と同様に早くからひらけた地域であった。「八幡信仰」は応神天皇のご神霊を称える信仰とされるが、「八幡」の文字が初めて登場したのは『続日本記』(797年、参考1)であり、それ以前に書かれた『古事記』(712年、参考2)、『日本書紀』(720年、参考3)には「八幡神＝応神天皇」を類推させる記述は見られない。

「八幡神」を応神天皇のご神霊と同一視するようになったのは、3世紀近く後の10世紀以降に始まった神仏習合以降のことであり、『東大寺要録』『住吉大社身代記』が編纂された平安時代以降のことである(註1)。

2) 「八幡信仰」と冶金技術について

宇佐地方に冶金技術がもたらされたのは5世紀初頭のことであり。朝鮮半島の動乱を避けて九州地方に入植した新羅系渡来族・秦氏(のち辛嶋氏)が、土木・養蚕・機織・採鉱・冶金・医術などの先進技術・文化・宗教などを豊前(福岡県東部及び大分県北西部)地方にもたらし、銅鉱の採鉱・精錬・鑄造などの労務に従事した。彼らがもたらした技術や文化は、九州の内陸(山間)部に伝播し発達していく。

3. えびす信仰について

1) 「えびす神」大略

「えびす神」は、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と伊弉冉尊(い

ぎなみのみこと)の間に生まれた第三子・蛭子の尊(ひるこのみこと)が「えびす」になったとされている。淡路島で生まれた蛭子の尊は先天的に足に障がいがあり、葦製の船に乗せられて海に流され、摂津西宮の浦に漂着した。

「えびす」は「夷(えみし)」が変化した語とされ、「戎・蝦夷」とも表記される。

元来「夷・戎・蝦夷」とは、「異郷人・東国人」を意味する古語であり、海を渡って流れ着いた「鯨・イルカ・流仏(溺死体)」なども「外国から訪れた神＝古代中国の西方異民族」と同義だと解釈され「来訪神」「漂着神」となった。

豊漁を祈願する海村の漁民たちは、魚群を伴いはるかかなたの海から回遊するクジラや大魚を「えびす」と呼ぶようになり、俗信として「えびす信仰」を定着させた。

「えびす神」の総本社である西宮神社は、室町時代に「戎社(えびすのやしろ)」「海社(うみのやしろ)」と呼ばれ、当時、神霊が宿ると信じられていた漂着物のための社殿を造り、祭りなどの行事を行ってきた。

その後「えびす信仰」は、西宮神社の雑役奉仕を行いながら傀儡(人形)を操り、神社の御礼を持って諸国を巡る傀儡師によって広められていった(図1)。

西宮神社の境内にあがめられている「傀儡師の始祖」は、室町時代以降、諸国を回り「えびす昇き」と呼ばれる操り人形の技芸とともにえびす信仰を広めた人々である。そして同時に、傀儡師の演じる「えびす昇き」が、海人の住む海岸部に技芸・文化として広まった。

2)「傀儡(くぐつ)」について

「傀儡師」は傀儡(人形)を思いのまま操り諸国を回遊した芸人のことである。江戸期になると、人形を納めた箱を首にかけて街角に現れ、技芸を披露し金銭を講う(乞う)門付け芸人のことをそう呼ぶようになった。「傀儡師＝門付け芸人」は、民俗信仰では季節の変わり目に神の祝福をもたらす「祝言人(ほかいびと)」と解釈されるようになり、ほかには「万歳」「鳥追」「夷舞」「大黒舞」「獅子舞」「ちよろけん」「猿回し」「厄払い」「節季候(せきざろ)」などと呼ばれた。

4. 八幡信仰・えびす信仰・人形浄瑠璃との融合

1)「冶金技術と傀儡(子)舞」

八幡神は奈良から平安にかけて大きな影響力をもち、信仰の対象となった。第45代聖武天皇の詔から開始された大仏建立時・749年(天平21年)に陸奥小田郡で我が国初の金

が産出され、天皇に献上された。このできごとが八幡神の恵によるものとされ、八幡信仰が広まっていった(参考1)。

また、宇佐神宮の放生会では、古要社(下毛郡/大分県中津市)と上毛郡の古表社(福岡県吉富町)が傀儡舞を奉納し、香春岳(かわらだけ/福岡県香春町)の銅で作った鏡が奉納されていた。8世紀の文献には、「むかし新羅の神が渡ってきて、この河原(かわら)に住んだので鹿春郷(かわらのさと)と名づけた」(参考4)と記されていることから、宇佐八幡宮と新羅系渡来族・秦氏(のち辛嶋氏)の冶金技術および傀儡舞の融合と伝播が確認できるのである。

九州の山間部で八幡信仰を広めた部族はその近海に海上交通権を有し、採鉱・冶金技術を発展・拡大させた。一方、瀬戸内地方を挟み対岸にある西宮では、下級神人を自称していた西宮居住の「えびす昇」がえびす信仰を広め、「傀儡(人形)」劇を伝播していた。

以上のような経緯で、二つの信仰の勢力拡大とそれに伴う技術の融合が瀬戸内地方を中心に促進し、人形を複雑に操る舞台芸能が形成されることになった。

5. 日本の三大芸能

「人形浄瑠璃」「能」「歌舞伎」(大略)

誕生の起源を上記のような経緯でたどることができる「人形浄瑠璃」は、「浄瑠璃」と「操り人形(からくり人形)」の二つの技術で構成される複合民間芸能である。

その後「人形浄瑠璃」は、大坂(維新以前の地名)に竹本座が成立し、江戸に伝播し最盛期を迎える。

他方、「人形浄瑠璃」とならび我が国を代表する伝統芸能となっているのは「能」「歌舞伎」である。

中国に起源をもつ「能」は、室町以降に「猿楽・田楽・延年の能」の3種から「猿楽の能」の人氣が卓出して主流となり人々の間に広まった。

一方「歌舞伎」は、平安時代中期、京都に疫病が流行した際、僧侶「空也上人」が病魔退散を願ひ瓢箪や鉢を叩いて拍子を取り踊りながら念仏・漢讃・和讃を唱えた「踊り念仏」(重要無形民俗文化財)に始まりを求めることができる(図2)。その後、安土桃山時代から江戸初期にいたる京の四条河原の仮小屋で興業を行っていた「出雲の阿国」が北野天満宮に定舞台を張り「かぶきおどり」を始めたのが「歌舞伎」の起源とされる。(図3、参考6)。

6. 浄瑠璃と義太夫節

①浄瑠璃

浄瑠璃の名の由来は「浄瑠璃姫十二段草子」(註2)という物語が平安後期に大いに人気を博し、その節回しを「浄瑠璃節」と呼んだのが事始めだとされる。当初は、中国から琉球に伝えられた三絃楽器・三味線が蛇の皮革を使用していたのだが、本土には大蛇が生息しないため代用品として猫の皮革が使用されるようになった。

「浄瑠璃」は、当初琵琶の伴奏による語りから始まり、後年、楽器が琵琶から三味線に入れ替わった。三味線の伴奏に太夫が詞章を語り、15世紀中頃「浄瑠璃」の音曲・劇場音楽が完成する。

浄瑠璃における「語り」は、劇中人物のセリフや仕草・演技の描写をも含み、語り口が叙事的な力強さを持つことから、現代の舞台劇や映画の脚本のような役割を担った。浄瑠璃口演は「語る」と表現し、浄瑠璃系統の音曲を「語り物」と呼ぶ。このため「浄瑠璃」はBGMのような役割を担いながらも、現在の音曲・劇場音楽とは異なるイメージで捉えられている。

また、「浄瑠璃」は京阪地域と関東地域では理解が異なる。京阪地域における浄瑠璃と義太夫節は同義語、すなわち「浄瑠璃＝義太夫節」と理解されるが、関東においては「一中節・常磐津節・新内節・清元節」なども浄瑠璃に含まれるため、義太夫節は浄瑠璃の一つの種類すなわち「浄瑠璃＞義太夫節」として理解されているからである。

②義太夫節

「義太夫節」は「浄瑠璃」成立から2世紀ほど遅れた17世紀末に成立し、人形浄瑠璃や歌舞伎の義太夫狂言の伴奏と語りを指す。「義太夫節」で使用される太字で書かれた原本を「丸本物(まるほんもの)」とも呼ぶ。「丸本」とは義太夫節の1曲全部を1冊に収めた完成脚本版のことである。

「義太夫節(丸本)と操り人形」を組み合わせ、歌舞伎のような演出と「播磨節・嘉太夫節・小唄」などを結合させ豪快で華麗な曲節を特徴とした複合舞台芸能が「人形浄瑠璃」である。

義太夫節は、太棹三味線が奏でる低音で迫力のある音色から別名「でんでんもの」とも呼ばれた。義太夫節は、1980年4月にはわが国の重要無形文化財に指定された。近代になり義太夫節で最も人気を博したのは、豊竹山城少掾であり(註3)、「山城風」と呼ばれる芸格でその名が広く周知された。

ちなみに、一中節・常磐津節・新内節・清元節など義太夫節以外の浄瑠璃原本の多くは細字で構成され、ページ数の少ないものを「薄物正本(うすものしょうほん)」と呼ぶ。

7. 操り人形(からくり人形)

人が操作して手足が動く人形を「操り人形・傀儡・木偶」などと呼び、これらを操る人々を「傀儡師」と呼んだ。

人形は、「神霊が降臨しその意志を伝えるための憑依体」「神がよりつく」ヒト型として古来より宗教的・呪術的な場面で使用されてきた。時代が下り「操り人形・からくり人形」などの形となって祭礼や興行で用いられるようになった。

前に述べたように、平安時代から室町時代にかけて、「傀儡師」は人形を操り芝居を披露しながら諸国を回る漂白の芸能者集団「西宮傀儡師」のことを指した。(図1、註4)

歴史上はじめて「からくり人形」が登場したのは、飛鳥時代の僧侶・智諭がつくり天智天皇に献上したとされる「指南車(しなんしゃ)」(図4、註5、参考7)であり、ヒト型の「からくり人形」についての最古の記録は優れた細工師とうたわれた賀陽親王(かやしんのう/高陽親王とも記される)が造った機械仕掛けの人形(図5、註6、参考8)であるとされる。

室町時代まで「あやつり」と称されていた人形は、戦国時代に「あやつりからくりもの」(参考『甲陽軍艦』)となり、その後「からくり人形」へと呼び名が変わった。

8. 人形浄瑠璃と文楽

1) 人形浄瑠璃成立後の浄瑠璃

八幡信仰とえびす信仰の影響のもと瀬戸内地方に発生した複合芸術は、三味線による伴奏の「語り物・浄瑠璃」と「傀儡回し・夷回し」が融合し、「人形浄瑠璃」として完成した。「人形浄瑠璃」は、慶長末期から元和(1615～1624)年にかけて、京・大坂から江戸に伝播し、繁栄を極めた。

浄瑠璃は「古浄瑠璃」と「新浄瑠璃」に分けられる。

①古浄瑠璃

竹本義太夫(註7)が近松門左衛門を座付作者に迎える以前の浄瑠璃は「古浄瑠璃」と総称される。15世紀に始まる『十二段草子』から16～17世紀初め、「浄瑠璃」は三味線・人形とともに確立し、享保末(1735年頃)まで、京・大坂・江戸などで興行された。

古浄瑠璃は中世的な色彩が濃厚であり、演目は「半太夫父子」「金平節」「播磨節」などに代表される。古浄瑠璃隆盛

の中期までは六段物、後期には五段物で構成された語り物
が中心で、物語の展開に重点が置かれ、登場人物の性格や
心理描写はないことから戯曲としては未成熟だったといえる。

②新浄瑠璃

新浄瑠璃とは、竹本義太夫(註7)が1684年に大坂・道頓堀に「竹本座」を設立し1705年に近松門左衛門を座付作者として迎えるなど活発化していき、少し遡って1703年未竹本座から独立した豊竹若太夫(註8)が「豊竹座」を設立したころよりのちの浄瑠璃を指す。それまで一人で行っていた人形操作(一人遣い)が1734年には三人の操作(三人遣い)となり(註9)、複雑化した華やかな演出で人形浄瑠璃の人氣が高まり、全盛期を迎えた。

③文楽

1800年以前、淡路出身の植村文楽軒(註10)が大坂・高津新地に文楽座の前身となる人形芝居の座を開き、その後難波新地を経て1872年に3代目文楽軒が大坂松島新地に「文楽座」を建てた。

1955年には「文楽座」の座員によって演じられる人形浄瑠璃が国の重要無形文化財に指定され、2008年には世界無形遺産に登録された。現在文楽は「人形浄瑠璃」と同義語で使用されている。

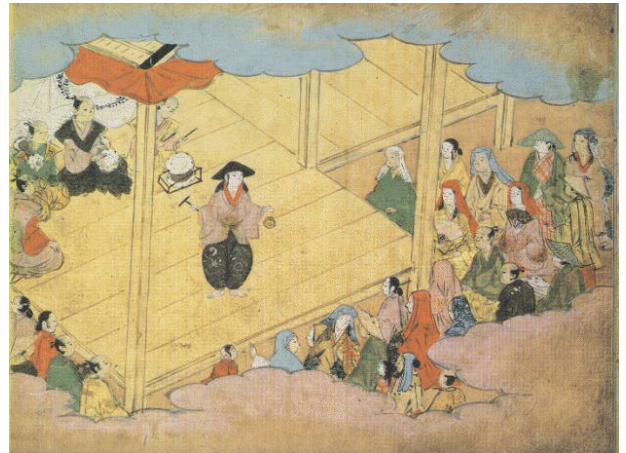
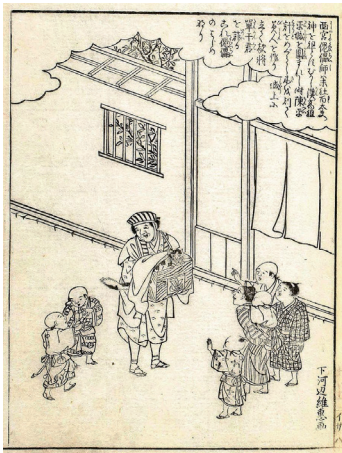
9.まとめ

人形浄瑠璃誕生には「人形」「人形劇」「八幡信仰」「えびす信仰」「傀儡師」「浄瑠璃」「義太夫」など多種多様なルーツにその発祥の根源を探ることができる。

さらに、これらが担う豊かな文化を背景に異なる由来の物語が融合し「燈籠人形芝居」が成立する。

上記の探求を元に、今後は、その発展形の一つである「燈籠人形芝居」の成り立ち・現在・今後の展望について研究を継続する予定である。

図版



左から 1.竹原春朝斎 《西宮傀儡師》ページ表記なし、『摂津名所図会』、1796~1798 /

2.空也上人像、康勝作、13世紀、木造彩色、117.6cm、六波羅蜜寺、京都、/ 3.出雲阿国歌舞伎踊り作者不明



左から 4. 王沂《指南車圖》『三才圖會』、パブリックドメイン

5. からくり人形を作る高陽親王、『前賢故実8』、独立行政法人国立公文書館所蔵デジタルアーカイブ

註

- 1) 『東大寺要録』は1106年編・1134年増補・再編の記録がある。ただし、『住吉大社身代記』撰は731年説、947～957年説、999～1004年説などさまざまあり、未だ定説はない。
- 2) 「浄瑠璃姫十二段草子」は平安後期、三河国の国司源中納言兼高と矢矧の娘「浄瑠璃姫」と「源義経(牛若丸)」との恋物語を十二段にまとめた草子。作者不詳。
- 3) 豊竹山城少掾(とよたけやましろのしょうじょ)/1878-1967は明治～昭和に渡り活躍した義太夫節の演者。
- 4) 漂白の芸能者集団とは居所が定まらず回遊する人々。山窩とも呼ぶ。
- 5) 「指南車」とは古代中国でつくられた方向を指し示す車。
- 6) 高陽親王(かやしのう=高陽親王)は桓武天皇の第十皇子。室町時代まで「あやつり」と称されていた人形は、戦国時代に「あやつりからくりもの」(参考『甲陽軍艦』)となり、その後「からくり人形」と呼ぶ名が変わった。
- 7) 竹本義太夫(たけもとぎだゆう)1651~1714とは江戸時代の浄瑠璃語りである、義太夫節浄瑠璃の創始者。古浄瑠璃に対する新浄瑠璃の開

- 祖となった。
- 8) 豊竹若太夫(とよたけわかたゆう)は竹本義太夫の弟子で美音表現に秀で竹本座とともに人形芝居繁栄の基礎を築いた。
- 9) 「一人遣い、三人遣い」とは、人形操作の技術者の数。
- 10) 植村文楽軒 1751~1810年。素生については諸説あり不明だが、「初代文楽軒」と呼ばれたことは確か。

参考文献

- 1) 『続日本記』(797年)
- 2) 『古事記』(712年)
- 3) 『日本書紀』(720年)
- 4) 『豊前風土記』(編纂年不明)
- 5) 竹内勝太郎「淡路人形座訪問」『芸術民俗学研究』1949
- 6) 『当代記』1624~1644
- 7) 『日本書紀』(720年)
- 8) 『今昔物語』(1120~40年頃)